

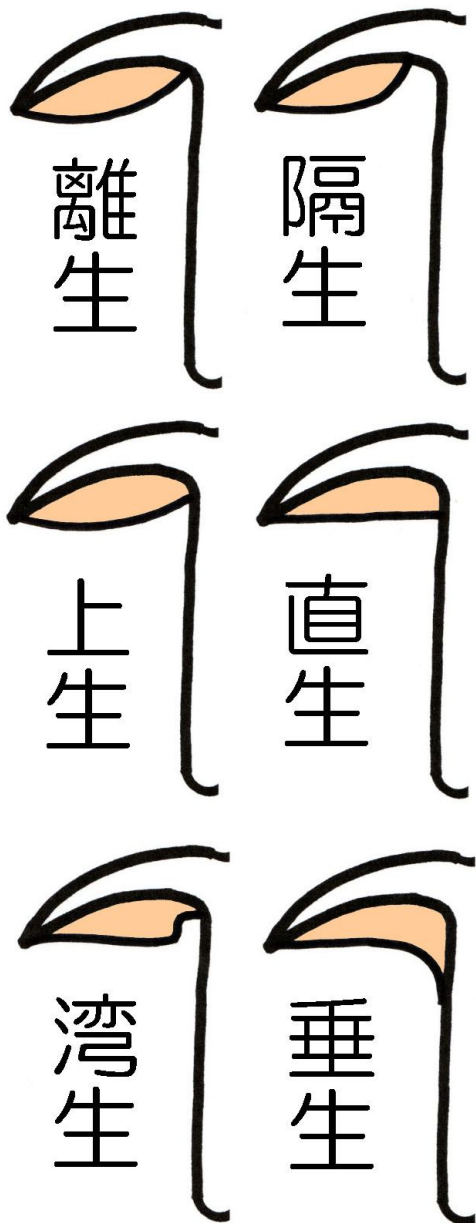
「初夏のキノコ (4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

キノコ(目に見える大きさの菌類の子実体)は、見た目が似たものも多く、素人には同定が難しい。特に食用として野外でキノコ採りをする場合は、正確な同定が必要だ。「赤いキノコは毒」「虫に食われていれば安全」「茎が縦にさければ食用」などは、古くから信じられている俗説(迷信)で、すべて完全に誤りだ。



キノコの同定で大切なのが、茎とヒダの接合のしかたである。大きく分けると、上の図のように6つの接合がある。(田中作図)



茎とヒダの接合を見るには、キノコを縦に切って、○の部分をよく観察する。カワリハツの場合「離生」をとる場合が多いが、一部「上生」の場合もある。



キノコは、菌全体から見れば、構成物のごく一部に過ぎない。菌体の大部分は、土や朽ち木の内部に蔓延(まんえん)する「菌糸」である。カワリハツの成菌を土ごと掘り出して、菌糸の存在を確かめてみることにした。



キノコと土がつながったまま縦に切って、茎の根元をよく観察してみた。カラマツの枯葉や土の隙間に、白い菌糸がぎっしり詰まっている。この菌糸が、同じ種類のキノコが発生している土地全体に蔓延している。そこには他のキノコは侵入できないことが多い。